HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	障子に題す
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報，特別号「ほのか」
Issue Date	1940
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77643
Type	article
File Information	A018_02_03all_Part55.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

障子に題す

芒亭

中秋の或る靜かな午後、日向に近い緣側で一人默々と障子を張るのは一年中の樂しい家庭行事の一つである。獨りで障子をはつて居ると何となしに閑寂とか侘びしさと云ふ樣な感じがする。秋の到來も此行事によつてはつきり意識されるのである。

私は維新前の侍の生活、それも中以下位の藩士達の生活に心をひかれるのである。當時としては高い教育をもちながら、僅かな知行に甘んじて閑素清廉な生活を樂しんで居た彼等である。日本人が本當に冀求する生活の型はそんな閑素な生活ではないかと思ふ。豪奢とか絢爛とか、さう云つた何となく飽くどいものは教養の高い日本人の眞に求むるものではない樣に思ふ。すべてわざとらしい落ちつきのないものは日本人の眞實に望むものではない。

閑寂な山寺、庭には白菊の幾株か咲いて居る。そこの緣側で、獨り障子の切りばりをして居る老僧を想ひ浮べて見るがよい。だが此圖は少しく侘びしい感じがきつ過ぎる樣である。此圖は支那や朝鮮の山寺の出家の生活にも見られさうなものである。出家と云ふ事自身が少し力み過ぎた感じを與へる。

形ばかりでも門構への侍屋敷、庭には梅の古木もあれば八つ手なども見える。下級藩士の暮しは少しも豐かではないが、朝餉には七分三分の麥まじりの飯に大根の味噌汁、時には秋刀魚の塩燒きや湯豆腐の肴に一合の晩酌で蕩然となる事もある。天氣のよい仲秋の午後、そこの椽側に端麗な風貌の侍が獨り默々として障子の切り張りをして居る。此圖こそ間違ひなく日本人の秋の生活圖の一つである。

歐洲に留學した人に向ふの人が日本の家は紙と竹とで作つたものだと聞いたがほんとかと尋ねたさうである。

歐洲人には日本人の住宅は全くそんなに見えるかも知れぬ。吹けば飛びさうなそんなキヤシヤなものに見えるのかも知れぬ之に比して石と土とで出來て壁が厚くて窓が少ない向ふの家に比すれば極めてキヤシヤに違ひない。私は曾て滿鮮旅行の歸途下關から汽車に乘つて車窓に見える日本の農家を見た時、私自身もそんなに思つた事がある。明け放した座敷の中に浴衣を着て團扇をもつて寢ころんで居るその一幅の浮世繪を其時私は他國にでも行つた時の樣に珍らしく眺めたものである。そしてマツチの棒の樣な柱が家の中に見えたのが、特にキヤシヤな感じを與へた。こんな家の構造は濕潤なタイフーン地帶の產物であると云ふ人がある。厚い壁、小さい窓は梅雨の頃の日本ではとてもやり切れないからである。然しそんな自然的な原因の外に日本人の開放的な生活形式からも說明されなければならぬ。日本人の特に田舍の生活は何もかも明けつぴろげてある。秘密と云ふ事が餘りないのである。日本人の神道の精神は淨く明らけき心を愛する。それは秘密の生活とは對蹠的である。村の人の明けつぴろげの生活、垣根さへもない家の構へは、最もよく日本人の生活態度を現はして居る。歐洲人の堅牢な住居は、他人の不可侵の城壘の構へでもあるが、牢獄の樣にも見える。

歐洲や支那の古い町では、家が城の樣な堅牢なものであるばかりでなく、町は繞らすに高い城壁をもつてして居る他民族の攻略や戰亂の不安を絕えず感じて來たこれ等の地方には、さうする事が必要である。日本の町に城壁がない事、家が城の樣でない事は、神國日本には曾て攻略蹂躙された歷史がないからである。

滿洲の豪農の家が高い城壁で繞らされ鐵砲を射る矢窓や見張り臺などが四隅にあるのを見て、日本內地に住む我々の幸福をしみ〴〵と感じた事がある。そこには町に城壁もいらぬし、家に鐵の扉を設ける事も必要でない。

隣りの家から秋刀魚を燒く香ひがするのをよんだ名句があるが、日本でこそ見られる風景物である。垣根越しに朝夕の挨拶をかはし、木戶をあけて朝顏の種子をもらひに行つて小半日隣りの庭で遊んでくる日本人である。

便所に行くにも扉にカギかけて出るホテルの室と、唐紙一枚でくぎつた日本の旅館とはよく日本的と歐洲的の特色を物語つて居る。日本にも盜賊は居るけれども、お互に信賴し合ひ明けつぴろげで親しみ合ふのが日本人の社會的態度である。

こんな日本人の生活は、住民が固定し何もかもお互に知り合つて居る農村部落の生活の內に成育して來たものに相